

伝統と生活の再編

佐藤信治¹, ○山内颯²
Sato Shinji, Yamauchi Hayatez

1. はじめに

近年、日本の文化が世界で注目を集め伝統工芸や祭りが文化財として登録され世界的に認知され始めている。特に、国内外で祭りへの関心が高まり、観光の大きな柱となっている。

本来祭りは、五穀豊穡や無病息災など人々の生活と密接な関係にあったが、生活の変容により多くは形骸化してしまっている。また、少子高齢化や収入の水準が低いなどの理由により、祭りを支える職人の担い手も少なくなり存続の危機が危ぶまれている。

また、祭りと同じように各地では商店街も衰退の一途をたどっている。少子高齢化や継ぐ人の減少など祭りと同様の理由により衰退している。

私は、祭りを守るためには、人々の生活と祭りの関係を再編することが重要であると考えます。

本提案では、祭りと人々がかつてのように密接な関係を取り戻し、時代によってその意味を変えながらも受け継いでいくことのできる商店街を設計する。

2. 計画敷地

計画敷地は、青森県青森市、青森駅の東側に位置する新町商店街とする。戦前から青森市の中心として機能し、時代ごとに更新され現代に至る。

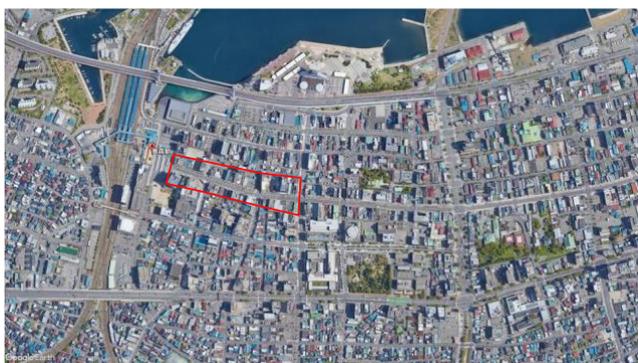


Fig.1 計画敷地

3. 計画背景

3.1 青森市で続くねぶた祭り

青森市には、約 400 年の歴史を持つねぶた祭りが存在する。幅 9m、奥行き 7m、高さ 5m と巨大な山車が製

作され、形を変えながらも現在に続いている。市街地の中心道路を歩くねぶたには山車の後ろに跳人（はねと）と呼ばれる参加者と囃子方が一緒に練り歩き、多くの人が祭りに参加することで成立している。



Fig.2 ねぶた

3.2 後継者不足

ねぶたの製作には、ねぶた師と呼ばれる絵師が構図を決め、木と金属のワイヤーを用いて型を作り、型に和紙をはり、その上に絵を描いていく。多くの工程と技術を要するため、技術者は年々減り現在は 10 名程度となっていて技術者の育成が急務である。

3.3 密かに行われる製作

製作には、ねぶた 1 体につき一つの小屋が用意されている。運行ルートに近くまとまった面積が必要であるため、現在ルートに近い親水公園の中に仮設的に建設されている。駅からは近いが、特別いくことは少なく製作過程は市民や観光客に開かれず製作は密かに行われている。これにより、祭りは人々の生活から遠ざかっていると考えます。



Fig.3 製作小屋

1:日大理工・教員・海建 Department of Oceanic Architecture and Engineering, College of Science and Technology, Nihon University.

2:日大理工・学部・海建 Department of Oceanic Architecture and Engineering, College of Science and Technology, Nihon University.

3.4 シャッター街となった駅前商店街

ねぶたの運行ルートや製作場所は青森駅周辺で行われている。しかし、現在ショッピングセンターの建設による、客離れしたことで、かつて人々が賑わっていた商店街は現在シャッター街となっている。多くの人の日常である場所が祭りの舞台となっていたことで、より祭りが魅力的であったと考える。ねぶた祭りとともに商店街を再興させることが必要である。

4. 基本計画

4.1 ねぶたと商店街の関わり

青森市のアイデンティティであるねぶた祭りを軸とし、伝統の継承と商店街の再興を目標とする。商店街と祭りの関係が時代によって変化することが前提とし、祭りが形骸化してしまわないようフレキシブルに対応できる建築を提案する。

4.2 ねぶたを街に組み込む

現在、人目に触れられることなく製作されているねぶたを商店街に組み込み、より身近に感じられるものとする。大きなスペースが必要とされること、運行ルートから遠すぎないことなどに留意してゾーニング計画を行う。人々が常に祭りと接点を持つことで新しい祭りの意義を考えながら生活する。

4.3 商店街の機能

現在駅前商店街は、少しずつ新規店舗が出店しているが多くのチェーン店の参入であり地域経済には貢献していない状況である。従来のような店舗のみの商店街ではなく、1次産業機能と2次産業機能を組み込み、6次産業化することで新たな商店街へと変化させる。下層を移動空間と商業の場とし、上層を住空間と1次産業の場とすることでコミュニティに違いを生む。

5. 建築計画

5.4 回遊性を生む隙間を作る

1 方向的な動線のみ商店街に、路地や広場を作ることによって余白を作る。余白によって回遊性が生まれ、人々が好きな場所を見つけだすことで常に商店街が更新されていく。

5.1 住民によるセルフビルドにより改築していく

ねぶたが毎年更新されていくように、商店街もセルフビルドによって更新していく。

隙間が住民によって作られていくことで、時代の生活に応じた空間が自然と出来上がっていく。

また、店舗や住居は立体的に拡張する空間とし、ねぶたの製作小屋へと変化できるようにする。拡張には、青森スギを用いることでかつての商店街と新たな商店街が感じられるようにする。

5.2 製作場を可視化する

現在、ねぶたの製作場は大きな白い幕で覆われ一般の人の目に触れることは少ない。繊細な作業が多いため、密閉された空間が必要なためである。小屋の仕切りを日差しを遮りながら、歩行者から見えるようにルーバーとすることで、製作場を可視化する。これにより、商店街のファサードにも変化をもたらす。



Fig.4 ルーバーによる変化

5.3 上層部を街に開く

上層部の空間は、セミパブリックな場所とするために商店街の隙間に階段を挿入し、誰もが登れるようにする。高齢者と若者との関係をより密接なものとするため、1次産業による食育体験や、ねぶたの製作技術や、その他工芸の伝承の場となる。ねぶた祭り当日には、観覧席となることで、観覧席不足解消にも繋がり、新たな視点でねぶたを楽しむことができる。

5.4 雪への対応

対象敷地は、日本屈指の豪雪地帯であり屋根の積雪への対策が必要である。

路地や、広場に向けて屋根に傾斜をつけることで自然落雪を促す。雪によって広場は小さな雪山となり、新たなアクティビティの場となる。

6. 参考文献

1. <http://www.ec.kagawa-u.ac.jp/~tetsuta/jeps/no3/ando.pdf>
2. http://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~socio/undergraduate/pdf/otsuron_2011_6_abs.pdf